

昨年度から、このような挨拶文を書く時にはどうしても新型コロナウイルスの話に触れる必要があり、書いている本人もどうしても元気が出ない書き出しになってしまいます。今もオミクロン株という新たな変異ウイルスが出現しており、このウイルスとの戦いはいつまで続くのだろうと悩みが絶えません。そして昨今、地球温暖化による異常気象が散見され、よく「観測史上過去最高」という言葉を聞くようになりました。そんな世の中に希望を与えようとするTV番組も多くなり、TBSの日曜劇場では現在、小松左京の不朽の名作「日本沈没」がドラマ化されています。このドラマでは日本沈没の主要メンバーである田所博士は出てきますが、主役の小栗旬の役はオリジナルで、とにかく日本国民をどうやって諸外国に移民させるかに焦点が当てられています。ただ私にとっての「日本沈没」は、今から約50年前の1974年、当時私が小学生だった頃に放映されていたドラマで、これが本当に強烈でした。当時は日曜日の夜8時から放映されており、村野武憲さんが実質主人公の小野寺を演じ、映画でも同役を演じた小林桂樹さんが田所博士というキャスティング。当時はその前の夜7時30分から「宇宙戦艦ヤマト」があり、地球がガミラス帝国の攻撃で汚染されてしまい、放射能除去装置を求め、ヤマトが遙かイスカンダルへ旅する物語です。毎回このアニメの最後には必ず、地球滅亡のカウントダウンが表示されます。そして佐々木功が歌う「真っ赤なスカーフ」が流れ、その悲しい曲に息苦しさを覚えます。落ち着いたと思ったら、8時から間髪入れず日本沈没が始まり、当時SF作品では珍しい演歌歌手五木ひろしを起用した主題歌「あしたの愛」が流れ、この曲を聴いただけで辛くなったものでした。このドラマでは、ビルの倒壊や地震の様子はミニチュアを使った特撮で描かれますが、そこにウルトラマンのようなヒーローは現れず、とにかく毎週、日本の一部が海の下に容赦なく沈んでいきます。毎週見るのがどんどん怖くなり、しかも宇宙戦艦ヤマトの裏番組では、これまた小松左京の「猿の軍団」が放映されており、こっちはこっちで地球の未来は猿が支配する世界になっていたといふとんでもない状況になっており、本当に日本は、いや地球は大丈夫なんだろうかと不安でよく夢に出てくるようになっていました。このいずれの作品も日本の遠い未来の話として描かれていますが、その遠い未来が今なのかもしれません。今年10月17日に創立70周年記念式典を多くの地域の皆様のご尽力で執り行うことができました。町長や歴代の校長先生にもご臨席いただき大変充実した式でした。そして何と言っても第70代生徒会長中込さんの挨拶や吹奏楽部の演奏、記念作品の制作、そして黙してきちんと前を向いて挨拶を聞いていた生徒の皆さんの態度に感動を覚えました。私は挨拶の中で、これからのSociety5.0の世界では、自動運転や農作業の自動化、ロボット技術の向上、ドローンによる物資輸送など小さかった頃、憧れた未来が既に現実のものになりつつあるという話をしました。同時にそんな社会で生き抜くために、アクシデントやトラブルに耐えられる危機意識と実行力を身につける必要があるとつくづく思うのです。そして来年こそ良い年になるよう心から願っています。